

セ給テ、表ニ奉タリケル紅ノ御衣一ツヲ取テ、打被サセ給ヒツレバ、輔親給ハリテ臥禮テ御隔子ヲ參リ畢テ、御衣ヲ肩ニ懸テ侍ニ出タリケレバ、侍共コレヲ見テ、此レハ何ナル事ゾト問ケレバ、輔親有ツル様ヲ語ケルニ、侍共皆聞テ極ク讚メ嗶ケリ、

〔帝王編年記一十七條〕長徳元年、今年郭公聲不絶、尤不吉事也、先々有恐、

〔枕草子五〕五月の御さうじのほど、まきにおはしますに、ぬりごめのまへ、ふたまなる所を、ことにまつらひしたれば、れいざまならぬもおかし、つゐたちより雨がちにてくもりくらす、つれづれなるを、郭公の聲尋ありかばやといふをき、て、われもくくと出たつ、賀茂のおくになにがしとかや、七夕のわたるはしにはあらで、にくき名ぞきこえし、そのわたりになん日ごとになくと人のいへば、それは日ぐらしなりといらふる人もあり、そこへとて、五日のあした、みやづかさ車のこといひて、北のちんより、さみだれはとがめなき物ぞとて、さしよせて四人ばかりぞのりてゆく、うらやましがりていま一つしておなじくはなどいへば、いなとおほせらるればき、もいれず、なまけなきさまにて行に、○中略道もまつりのころおもひ出られておかし、かういふ所にはあきのぶの朝臣のいへあり、そこもやがて見んといひて、車よせておりぬ、○中略雨ふりぬべしといへば、いそぎて車にのるに、さてこのうたはこ、にてこそよまめといへば、さばれみちにてもなどいひて、卯花いみじくさきたるを折つ、くるまのすだれそばなどに、ながき枝をふきさしたれば、たゞうのはながさねをこ、にかけたるやうにぞ見えける、ともなるをのことも、いみじうわらひつ、あじろをさへつきうがちつ、こ、まだしくとさしあつむなり、○中略此車のさまをだに人にかたらせてこそやまめとて、一條殿のもとにとめて、侍從殿やおはします、郭公のこゑき、ていままなかへり侍るといはせたる、つかひたゞ今まいる、あがきみくとなんのたまへる、○中略あへぎまどひておはして、まづ此くるまのさまをいみじくわらひ給ふ、うつ、の